

# 松本清張記念館

◆館報◆

2002. 1  
第8号

## 残るは最後の策なり



昭和30年(1955)11月初版 高山書院

『西郷札』は、清張が朝日新聞西部本社に勤めていた昭和二十五年、『週刊朝日』が募集した「百万人の小説」に応募し、三等入選したデビュー作である。『週刊朝日別冊 春季増刊号』(昭和二十六年三月)に掲載され、第二十五回直木賞候補になった。  
表紙の『西郷札』は昭和三十年十月、高山書院から出版されたもので、清張五冊目の著書である。

現在入手できる本

松本清張全集 第三十六巻(文藝春秋)  
西郷札 傑作短編集三(新潮文庫)

### 作品介绍

『私』を一読して、(私)は興味を惹かれた。——  
明治十年、雄吾は西郷隆盛率いる東上軍に身を投じた。田原坂の敗戦後、薩軍は宮崎まで敗退し、そこで西郷札を造幣した。負傷した雄吾は村人に助けられ九死に一生を得る。だが故郷に帰ると、父は死に家は戦火で焼かれていた。義妹の季乃の行方は知れなかった。

東京に出た雄吾は人力車を引く車夫になる。ある夜偶然、雄吾の眼前に季乃が現れた。塚村圭太郎という男の妻になっていた。密かに二人は逢い続ける。そんなとき雄吾は幡生桑太郎という男に、政府の要職にある塚村に西郷札の政府買い上げの件で運動してくれるように頼まれた。雄吾は季乃を介して塚村に会う。後日、塚村は「充分見込みがある」ので宮崎に行き、密かに西郷札を買い集めるように雄吾を促す。塚村の言葉を信じた雄吾らは買い占めに狂奔した。

しかし一切は、季乃と雄吾の間に嫉妬した塚村の陰謀であった。東京に帰った雄吾は詐欺の容疑者として手配されていた。雄吾は「最後の策」を決意するが……  
(学芸担当 中川 里志)

### 目次

● 清張を語る	2
● 企画展 寄稿 飯窪敏彦	2
● 「証言」朝日新聞社時代の松本清張	4
● 展示品紹介	5
● 探検! 清張記念館	5
● みんなの広場	6
● お知らせ	7
● 北九州文学マップ	7
● トビックス	8

# 「清張“社長”との一夜」

フアインダー越しに見たもう一つの「顔」  
—  
今回の「清張を語る」は文藝春秋編集委員・飯窪敏彦さんにお願ひしました。



変装(?)した清張

文藝春秋の写真部員として三十数年  
仕事をしてきて、偉人、巨人、大家、鬼才、  
ごく稀に美人と直に接することができ、  
職業冥利に尽きるなと思っっています。清  
張先生の写真取材も数回あって、昭和五  
十七年、五十八年にかけては、大分の古墳、  
鯛生金山、福岡の瀬高町と、九州への同行  
取材が三度続きました。

記念館の図録の表紙写真は五十八年の  
三月に博多のホテルでコーヒをこ緒し  
た折に、窓からの光だけで数枚撮らせてい  
ただいた中の一枚です。先生自身が写真を  
撮るのが好きということもあって、撮影に  
進んで協力していただけました。「ぼくは  
アングラーの写真が好きなんだ」とよく言わ  
れてました。つまり、意図的に露出不足で  
撮って、少々暗めに仕上げる写真が好みだ  
ったようで、この  
ことはお書きに  
なる小説の世界  
にも共通するも  
のがあるかも知  
りません。



記念館図録の  
表紙写真

細やかな気配りをなさりながらフラン  
クにつきあっていたとき恐縮するほどでし  
たが、ひとつおもしろいエピソードがあり  
ます。

昭和四十五年二月のことです。先生の  
もとに、さる信頼できる筋より、三億円犯  
人と思われる男がいるとの情報が入って、  
その男は都内某所でスナックのマスターを  
やっているの、店に行ってみようというこ  
とになりました。編集部M氏と私が同  
行することになり、私の役目は“その男”  
を盗み撮りすることです。スリリングな仕  
事で緊張しましたが、店に入る前に先生  
は「これからぼくは変装する。そして、中  
小企業の社長と社員のグループというこ  
とにしよう。ぼくのことを社長と呼びな  
さい」と言うので、やおら持参したベレー帽  
をかぶって、サングラスをかけたのです(写真  
参照)。しかしです。その程度では変装とい  
うには程遠く、先生のお顔はかなり知ら  
れているからばれてしまうのではないかと  
大変心配になりましたが入店しました。  
思ったより狭い店で、遠くからの盗撮は無



飯窪敏彦  
iikubo toshihiko

プロフィール

早稲田大学文学部美術  
科卒業。文藝春秋に入社、  
写真部員となる。現在は第3  
編集局編集委員として撮影  
現場に出ている。今年3月で  
定年となりフリーカメラマンに  
なる予定。昭和17年札幌市  
生まれ。



## 松本清張研究会

### 第5回研究発表会

十二月一日、「松本清張研究会 第五回研究発表会」が記念館で開催されました。過去四回は東京で行われましたが、今回は地元ならではの清張研究を続ける「北九州松本清張研究会」との交流を図るため、北九州市小倉の地での開催となりました。

講演は、研究会常任理事で立教大学教授の藤井淑禎先生が行いました。演題は『清張ミステリーと女性読者』で、「箱根心中」（昭和三十一年『婦人朝日』）、「遠くからの声」（昭和三十三年『新女苑』）、「二階」（昭和三十三年『婦人朝日』）、「愛と空白の共謀」（昭和三十三年『女性自身』）、「文字のない初登攀」（昭和三十五年『女



藤井淑禎  
立教大学教授

性自身』の各作品を紹介しつつ、初期清張作品が男女間の愛憎をどのように描いたかを分析されました。「遠くからの声」までは、制度や規範の側に加担し懲罰的に描いていた。それが、しだいに愛の側に加担していき、『女性自身』と出会うことによって、自立した女性たちの堂々たる生きつづりへの応援歌という方向へ転じた。世の中の空気の変化を正確に反映させた応援歌としての作品作りが、この時期の清張ミステリーの大きな特徴であり、そこに女性読者の心を掴んでいった清張ミステリーの戦略を見ることもできる、と論じられました。

研究発表は、「黒地の絵」について北九州研究会会員で



松本常彦  
北九州市立大学助教授

北九州市立大学助教授の松本常彦先生が行いました。同作は昭和二十五年小倉で実際に起きた米兵脱走騒ぎを題材にした小説ですが、作品自体がはらんでいる文化的、政治的問題をあぶり出す形の発表で、質疑応答も活発にくり広げられました。

記念館友の会会員や一般市民の方々も多数参加され、約八十名の参加者は長時間の発表会にもかかわらず熱心に聴講していました。

また翌日には、北九州研究会の代表で北九州市立大学教授の赤塚正幸先生の案内で「文学探訪」に出かけました。明治三十二年六月から三十五年三月まで、森鷗外が陸

理なようなので、「その男」が内側にいる力ウンター近くの席を取りました。しばらく社長と社員はビールやコーヒーを飲みながら、会社の話などを続けましたが、頃合を見て、私はカメラを取り出しテーブルに置くと、「社長、私は最近カメラに凝ってまして、先日買ったのがこれです。社長を写真してみたいのですが、この暗さでは写るかどうか」と社長にカメラを向けました。しかし、ヒントは後ろにいる「その男」です。社長は「ストロボがなくて大丈夫？」

などと案じる演技をしていましたが、何枚かシャッターを切って、高感度フィルムが入っており、手ごたえがあったので無事撮りました。冷や汗ものの即興芝居が終わってぐったりして出ると、先生は銀座の高級クラブで我々を労ってくださいました。

後日、仕上げた写真をお渡ししましたが、その後どうなったかは聞いていません。社長と連呼したこと。ペレー帽とサンダラスの何ともほほえましい巨人の姿が今なおしっかりと心に残っております。

軍第十二師団軍医部長として小倉に勤務した折、始めの一年半を暮らした「森鷗外旧居」（北九州市小倉北区鍛冶町）。小説「鶏」はこの家を舞台にして書かれました。次いで洞海湾にかかる若戸大橋をわたり、若松駅前にある「火野葦平資料館」で、清張が芥川賞受賞直後に葦平に宛てて書いた書簡を特別に閲覧させていただきました。最後に、葦平が昭和十五年から三十五年まで過ごした「火野葦平旧居 河伯洞」を訪問し、「花と龍」や絶筆「真珠と蚕人」をそこで執筆し、また自ら命を絶った書斎などを見学しました。



会場の模様

# 証言 — 朝日新聞社時代の松本清張

没後10年記念 特別企画展「ふるさと小倉シリーズ⑤」

証言

朝日新聞社時代の

# 松本清張

平成十四年一月十二日(土)～三月三十一日(日)  
松本清張記念館 企画展示室

第五回目の「ふるさと小倉」シリーズは、小倉で過ごした最後の時期を含む、専門作家となるまでの朝日新聞社時代にスポットを当てました。

「このころについて清張自身は「単調で退屈な生活だった」と述べています。しかし、当時の清張を知る方々からいただいた新証言や資料、清張自身の著述や作品を再吟味すると、「半生の記」にはない清張の姿が見えてきます。今回の企画展では、「半生の記」などで描かれた自画像とはひと味違う、新たな清張像を紹介いたします。

(学芸担当 小野芳美)

## 1. 朝日新聞西部本社〈時代〉

昭和12年、大阪朝日新聞九州支社(15年に朝日新聞西部本社に昇格)は小倉市砂津にモダンな建物を建て、市民の話題をさらいました。

清張はこの年から昭和31年まで朝日新聞社で過ごしました。このコーナーでは、朝日新聞西部本社の変遷や時代背景を追います。



【展示品】  
大阪朝日新聞九州支社新社屋完成披露パンフレット・絵葉書(昭和12年) など

## 2. 歯車のネジ —〈社員〉松本清張

同じように広告版下を描くといっても、新聞社の一員となった清張は仕事に変化を余儀なくされました。ここでは、新聞社の機構の中でのさまざまな「社員」としての清張の姿を紹介します。



【展示品】  
清張の描いた広告のパネル、当時の社内図 など

## 3. 家長として —松本清張のもう一つの〈素顔〉

清張も気晴らしに同僚と将棋や麻雀に興じた日もありました。家では一家の長として、休日家族と過ごすこともあり、押し寄せる時代の波から家族を守るべく尽力もしました。仕事を離れた清張の「素顔」の一部を紹介します。



【展示品】  
清張のアルバムより写真、清張がデザインした包装紙、清張が描いた友人の似顔絵 など

## 4. 泥砂の中 —〈旅人〉清張

清張は仕事以外の分野にもひろく関心を持ちました。機会をみつけては旅をし、考古学・カメラ・俳句・英語など、このころ培った知識の多くは作家となってから活かされています。ここでは、のちの作家・清張の「知」の素地をかいま見ることが出来ます。



【展示品】  
第一回社内美術展目録(昭和21年)、朝日厚生俳句会関係資料、考古学関連書籍、松本清張名刺 など

## 5. 出逢いとしての〈百万人の小説〉 — 芥川賞受賞前後

昭和25年「西郷札」で『週刊朝日』の「百万人の小説」に入選した清張には、文学を通じて新たな知己との出逢いがありました。「或る『小倉日記』伝」での芥川賞受賞、そして上京・専門作家への決断、という人生の大きな転換点には、先輩作家や同僚たちの激励やアドバイスがあったことを紹介します。



【展示品】  
火野葦平書簡、週刊娯楽紙「朝日ウィクリー」、初期作品掲載誌 など

# 銅鐸



銅鐸は弥生時代、日本で作られた青銅器の一種です。すその広がる扁円筒形の身は空洞で、両側に魚の尾のような縁・鱗・ひれが張り出し、頂に鈕(ちゆう)とよぶ釣り手が付きます。鳴らした形跡が残る古い銅鐸もあります。清張は銅鐸は「権力者の財物」としていますが、一般には「祭祀」などの儀式に使われたと考えられています。記念館では、清張が蒐集した三個の銅鐸を見る事ができます。

一つは、第二展示室「古代史コーナー」に展示されています。高四センチで、身の反りが強くひれ幅の広い特徴的な中型袈裟襷文銅鐸です。神戸市渦森出土、伝徳島出土などのものと同じグループの銅鐸ですが、特に渦森出土とは身が同大で、同型です。銅鐸に詳しい考古学者三木文雄氏は、「本銅鐸は、損じがあるのは惜しまれるが、銅鐸盛行期の好例の一つである。」(清張日記昭和五十六年二月二十七日)と鑑定されました。

あとの二つは小型の銅鐸で——再現家屋に展示されていますが、目にされた方は少ないのではないのでしょうか。玄關の前に立ち、注意深く覗きこんで見て下さい。すぐ左の靴箱の上に、高十九センチの銅鐸と、高十センチの素文の小銅鐸が並んでいます。

いずれも清張が蒐集したものです。清張は前出の「清張日記」の中で、「自分は『骨董』に興味なし。ただ古代史関係のものを書いていけば、現物をいつでも手にさわるところに置きたくなるものだ。(中略)自分のものだと、欠片をむしりとることも自由だ。現物を見もしないでという誘いをつけないためにも中略、これは自己の資料参考品である。」と述べています。

「銅鐸」については「清張通史」カミと青銅の迷路で詳しくその起源や製作者、文様や地下埋蔵の意味などの謎に挑み、大胆な「私説」を展開しています。しかしそれをふくめ清張の発表した諸説への学界の反響は少なかつた。専門の研究者には、作家の古代史は研究史や学説史を踏まえ、史(資)料の性格や特質への配慮に欠けるとの不満が強いようです。「古代史疑」や「古代探求」、「私説古風土記」などを読むと、清張古代史にその批判は当たらないことが分かります。

京都橋女子大学長の門脇禎二氏もこれを認め、「松本さんの古代史だけでは、敬遠するところかいつしか一種の畏れさえも、わたしは覚えるようになった。」(松本清張の古代史)と書かれています。また大阪市立大学名誉教授の直木孝次郎氏は、「魏志倭人伝」に見える里数・日数が五行説にもつき作爲された数字であり、倭までの距離万二千余里という数字も虚妄であるとした清張説は以後の学界に影響を与え、「松本さんは既成の学界の『天窓を開け放つて、爽な空気を』吹きこんだことだけは確かである。松本さんの古代史に果たした功績はきわめて大きい。」(松本さんの古代史)と評価されました。

展示ケースの中の銅鐸を見ると、その青銅の面に、遺跡を調査し、史(資)料を博捜・渉獵し、古代史の謎の解明に没頭する清張の姿が、文様のように浮き出てくる思いがします。

(学芸担当 中川 里志)

## 老よしとハルコの探検! 清張記念館

### “B1F ミュージアムショップ”の巻

**きよし** うわー、記念館グッズってこんなにあるんだ。「清張モノ」の品ぞろえは日本一。当たり前か。



**ハルコ** 企画展の図録も全部ある。見のがした回分、買っちゃお。全集もそろってるし、清張作品が欲しくなったら、ここに来れば、完ぺきね。

**きよし** 買い物だけなら、無料でいつでも来れるんだよ。また今度研究誌を買いに来ようっと。

**ハルコ** またあ。店員さんに会いたいただけじゃないの?

**きよし** ……。あ、あのテーブルセンター、清張の絵じゃない?

**ハルコ** 話をそらしたわね。『火の路』の取材スケッチじゃない。



▲テレホンカード、テーブルセンター、絵はがきなどが人気

**ハルコ** 絵はがきなんかも清張の絵よ。絵がこれだけ商品化されている作家はきっと少ないんじゃないかな。元デザイナーの面目躍如って所かしら。

**きよし** <sup>センス</sup> さすが清張、扇子があるね、…っと。

**ハルコ** 私、ダジャレ嫌い。ついてこないで。

**きよし** そ、そんなあ〜。

当館でしか買えないオリジナルグッズは30種類以上。記念に、おみやげに、記念館での感動を持ち帰り。ミュージアムショップは地下1階、階段を降りてすぐです。(開店時間9:30~18:00)

# 「砂の器」読書会



去る十月六日(土)と十三日(土)の両日、記念館友の会との共催事業として、平成十三年読書会を実施しました(参加者二十二名)。今回は、「砂の器」を題材に、参加者

それぞれが作品に対する感想・意見などを述べ合う形式で行いました。

読書会の冒頭で、講師の小林慎也梅光学院大学教授から、「砂の器」に関する解説をいただきました。解説の要旨は次のとおりです。



## 一、作品の座標軸

推理小説に登場する人物は、被害者、加害者、関係者、謎解き者、または捜査官に分類されるのが普通である。「砂の器」の場合は、もう一つ別の要素がある。犯人となる和賀英良と三人の父親である。実際の父親、養子に迎え、父親役を果たそうとした三木謙一、婚約者の父親である有力政治家、この父と子の関係、人間劇が主要な骨格となっている。

これは、捜査にあたる警目二人の関係にも重なり、父世代

と子世代の対立の形をとる。

当然ながら、その背景には、戦争経験や戦後の価値観、過去の清算などの問題なども浮かび上がってくる。

もう一つは作者の「父と子」である。清張の父は、「半生の記」などによれば、何度も職業を変え、苦労したようだが、親子関係は良く、父親を好きだったようだ。キーワードになる「方言」は父親の出身地に近いなど、和賀の父親との類似点が見られる。

## 二、作品の背景

この作品が書かれたのは昭和三十五〜三十六年である。三十五年は六十年安保の年、国会議事堂を三三隊が包囲した。この前後に、皇太子ご成婚、週刊誌ブーム、北九州市で火野葦平の自殺などがあつた。やがて、東京一新大阪間の新幹線開通、東京オリンピック開催などが続き、高度経済成長が加速していた。新しいものと古いものさまさまな交代劇が進行した時代であった。

また、作者にとって、全国紙の新聞小説を初めて執筆したことも注目したい。前衛音楽など新しくユークな材料を選び、日本各地を登場させるなど、時間空間の幅は一段と広がった。

「砂の器」は映画化もされていることから、清張ファンのみならず、一般の多くの方々もその名前を知るところです。ディスカッションでは、小説に限らず、映画「砂の器」との対比にまで話が及び、大いに盛り上がりを見せました。二回とも予定時間を大幅に超過し、「語り足りない」との意見も出るほど熱気のある読書会となりました。

# 「砂の器」上映会



去る十月二十日(土)、小倉井筒屋パテルホールにおきまして、「砂の器」上映会が行われました(北九州シネマサロン主催・松本清張記念館開館三周年記念協力事業)。

北九州シネマサロンは、日本映画を通じて、映画及び映像文化の振興と映像の視点から郷土を学ぶことを目的とする団体で、春と秋に、北九州

市に關係する映画の上映とその映画

の關係者を招聘してトークを実施しており、今回は六回目に当たります。

当日は、ゲストとして「砂の器」撮影監督・川又昂氏をお招きし、上映前にトークショーを行いました。会場の四〇〇ある座席がほぼ満席となる盛況ぶりでした。



## 「松本清張への思い」

清張氏は私のもっとも尊敬する作家です。今の日本を書いて欲しかった。あとにも先にも清張氏のような方はいないと思います(歴史観で)。

(50代 北九州市 女)

清張が英語を話せるなんて知らなかった。けっこう現代的な人なんだなと勉強になった。

(10代 北九州市 女)

よく勉強され、語学・美術等いろいろな方面にもすぐれている。いつでもメモを持ち歩く熱心さに感動しました。また、字がすばらしい。

(40代 福岡 女)

記念館に来て、松本清張氏の幅広い活躍を知りました。原稿の文字の立派さ、物事に対する几帳面さには驚きました。

(60代 福岡 女)

30年近く前になります。先生がロサンゼルスにお越しになった折、あつかましくもホテルのお部屋に電話をさし上げてお目にかかりました。“何かおもしろい話があれば知らせて下さい”をおっしゃっていたのが耳に残っています。探求心旺盛な方だったのですね。

(50代 アメリカ 女)

## みんなの広場

### 編集部より

今回もたくさんのご意見をいただきありがとうございます。

実に様々な「松本清張への思い」をお寄せいただきましたが、中でも、文学活動のみならず絵画や写真など幅広い分野に秀でていたことへの驚きの声や物事に対するあくなき探求心への感嘆の声が、揃って数多く寄せられたことが印象的でした。

今後ともご意見・ご感想をどしどしお寄せ下さい。

このコーナーではアンケートなどで寄せられた意見をもとに、テーマごとに集約して発表しております。第7回のテーマは、

### 「松本清張記念館を訪ねて思ったこと・感じたこと」

です。皆様の声をお待ちしております。(アンケートは館内にも置いてあります。)

# シンポジウム および 文芸講座の開催について

松本清張記念館では、企画展「証言——朝日新聞社時代の松本清張」の開催に合わせて、下記の日程でシンポジウムおよび文芸講座を開催します。内容につきましては、館報第9号にてお知らせします。

## ◆シンポジウム

日程：平成14年2月26日（火）14:00～16:00（予定）

場所：小倉リーセントホテル

内容：①講演「清張さんの思い出」

講師／中江利忠氏（朝日新聞社顧問）

②パネルディスカッション

「松本清張と朝日新聞社」

コーディネーター／小林慎也氏（梅光学院大学教授）

パネリスト／中江利忠氏（朝日新聞社顧問）

安間隆次氏（文芸評論家）

## ◆文芸講座

日程：平成14年2月28日（木）14:00～16:00（予定）

場所：小倉リーセントホテル

内容：①「清張と『半生の記』

——戦後の10年を中心に」

講師／小林慎也氏（梅光学院大学教授）

②「初期清張作品について

——企画展に関連して」

講師／赤塚正幸氏（北九州市立大学教授）

## ●お知らせ●

# 研究誌『松本清張研究』第3号

予告

『松本清張研究』は、全国の第一線研究者に呼びかけ、さらなる研究の推進と後継者の育成をめざして、年1回、記念館で発行する研究誌です。

毎年、「清張と鷗外」、「松本清張と菊池寛」など基本的な研究テーマを深く掘り下げた特集を組んでいます。

第3号の特集は、「清張文学と旅」です。宮部みゆき氏（作家）や川本三郎氏（文芸評論家）、半藤一利氏（作家）による座談会や、〈初公開〉になる「松本清張のヨーロッパ取材日記」など、研究者及び清張文学の愛読者には必見の内容が盛りだくさんです。

### ●特集——清張文学と旅——

〈座談会〉宮部みゆき（作家）、川本三郎（文芸評論家）、半藤一利（作家）

「清張文学と旅（仮称）」山田有策（東京学芸大学教授）

「『半生の記』に描かれた旅」平岡敏夫（筑波大学名誉教授）

「初老の憧憬、もう一人のゴーガン——松本清張「駅路論」」花田俊典（九州大学教授）

「死の彼方まで——『砂漠の塩』論——」天沢退二郎（詩人・明治学院大学教授）

「清張文学における「旅」——『砂の器』の記号論——」仲正昌樹（金沢大学助教授）

「松本清張の旅」宮田稔栄（元中央公論社編集者・エッセイスト）

〈初公開〉「松本清張のヨーロッパ取材日記」

座談会「『草の径』取材随行記」

藤井康栄（松本清張記念館館長）、岡崎満義（ジャーナリスト・元文藝春秋編集長）、

田中光子（文藝春秋編集者）

### ●その他論文など——

藤井淑禎（立教大学教授）

高橋和夫（国際政治学者）

## 北九州文学マップ——横山 白虹

### 夕桜 折らんと白き のど見する

昭和二十四年、横山白虹五十歳のときの作。衝動を押しさえ切れず、桜を折ろうとする一瞬の情景が描かれている。色鮮やかな油絵を見るようである。数多い白虹の句碑のうち、この句碑は小倉北区足立山麓にある妙見神社の境内に建っている。

横山白虹は、明治三十二年東京に生まれ、大正九年九州帝国大学医学部を卒業した。昭和九年、小倉に横山外科病院を開設、昭和五十八年八十四歳で没するまで小倉ですごした。医師であり、また市会議員などもつとめ、現代俳句協会の会長に六期も推された。

市議時代、横山白虹は東京平河町の都市センターホテルを定宿としていた。このホテルに勤めながら小説を書き始めた森村誠一を松本清張に紹介したのは、白虹であった。

「昭和二十八年十二月二十一日  
夜七時、小倉駅を発つ。本社関係者のほか横山白虹、劉寒吉、丸橋静子の諸氏に見送らる。」

松本清張は、昭和二十八年朝日新聞西部本社から東京本社に転勤した。自宅書庫でそのときの様子をつづった日記を偶然見つけた清張はなつかしんで、「清張日記」（昭和五十六年一月一日）に再掲した。

（中野 吉明



- 1 和布刈る神の五百段めれてくらし  
霧青し 双手を人に差ししのはず  
（小倉北区・門司区・門司港駅構内）
- 2 雷罪々と骸梯のぼる降ぬれたり  
（八幡東区・小倉城苑）  
瀧あひし 貌人間の眼をひらく  
（八幡西区・音滝観音）  
藤棚の下の浄土のこみあへり  
（八幡西区・吉祥寺）



